



始



特100
488

成功
捷徑

法學士
鈴木皓天著

立身の相談

東京 産業書院發行

大正
4. 6. 18
内交



序

文明の日と共に進歩し行くに連れ、教育の程度も自らが高
るのには當然の理であるが維新當初の如く、又明治中世の如
く、教育の程度も低く、未だ歐米先進國の進歩せる一般科學
の輸入もなく、従つて國民の科學的智識も幼稚であつた。
かゝる時代にあつては一定の學業も修めず、また左程の教
育もなくしても、一旦社會に出づれば直ちに相當の地位を
得られたが、しかし現代の如く近代歐米の文明の精華とも



云ふべき諸種の科學が日と共に輸入せられ、多くの青年は競ふて各種の専門學校に入り是等の新科學を研究し、而して將來自己の社會に於ける地位を得んことに吸々としてある有様である。かくの如き有様故、社會のあらゆる地位は、是等専門學校卒業生等に依て壟斷せられ、從來の如く小學卒業生、中學卒業生の如きは社會に於て相當の地位を得ることとは頗る困難なこととなつた。

かくの如く高等教育の普及は國家としては眞に喜ぶべき現象であるが、しかし其れが爲めに高等教育を受けざる



ものが益々不幸に陥るといふことは眞に悲しむべき現象である。云はればならぬ。其故動もすれば暗黒に閉ざされ易い、是等少年の進路に一道の光明を與へ、而して不幸悲惨の暗黒裡より救はんが爲めには常に多くの識者の悩む處になつてゐる。

如何にして數へ知れぬ困難を排除し、暗黒苦慘の境を脱がれ出で、而して光明ある未來への進路を求むべきか、現代少年の痛切なる要求である。此の要求にして可能とせられたならば少年の未來は如何に楽しく美しいものであ



らう。此の楽しい、美しい未來を有する少年にして始めて
 人生の樂園に行くべき道程にあるものと云ふべきである。
 本書の目的とする處は、少年が暗黒苦慘の境を離脱し、光
 明ある未來へ進むには如何にすべきか、人生の樂園に到達
 するには如何なる道程を辿るべきかを指示せんとすることに
 ある。若し本書が幸ひにして少年諸子の好伴侶たること
 を得たならば、著者は限りなき喜びを感じるのである。

大正四年五月

著 者 識

成功立身の相談目次

小學卒業生は如何にして世に立つべきか……………一
 大切な時……………三
 何にならうか……………五
 何の爲に學問をするか……………九
 學問は自分の利益の爲にするのではない……………一一
 中學にゆかずに……………一六



自己を知れ……………一七

現在なり得る事をなした上で次に進め……………一八

誘惑は常に美しい假面を冠つてゐる……………一九

修養に打ち克つものはない……………二一

金力は役に立たない……………二三

獨立と冒險的精神……………二四

幸福に世渡りするとは……………二六

情は人の爲ならず……………二七



中學程度の學校には……………二九

中學校……………三〇

如何にして中學を選ぶべきか……………三四

甲種商業學校……………三七

乙種商業學校……………三八

農業學校及工業學校……………三九

師範學校……………四三

陸軍地方幼年學校並に中央幼年學校豫科……………四四



入學志望前の心得……………四六

遙けき空へ……………四七

悲しき時は神に依りて慰安を求めよ……………四九

功成り名を遂げずんば死すとも歸らず……………五〇

物事は馴れて來ると……………五二

父母の側に待してゐるものと思つて……………五三

自己を偽つてゐるのである……………五四

眞面目の態度で疑へ！……………五六



よき變化はお互に喜ぶべきことである……………五八

社會を知るのが肝心……………六二

如何にして社會を觀察すべきか……………七三

職業は如何にして撰擇すべきか……………九五

小學卒業生に適する職業……………一〇五

余暇を利用せよ將來大に活動せよ……………一〇九

成功立身の相談目次終



成功立身の相談

法學士 鈴木皓天著

小學卒業生は如何にして世に立つべきか

校庭を飾る紅の櫻花、軟かい微風に吹かれて、
一片二片と散り初むる陽春の三月、諸君は満六ヶ年
の螢雪の苦を積んだ、懐しい校庭を去り行くのであ
る手にせる一片の證書、小學全科卒業證書は、これ



六ヶ年間の螢雪の苦を現はした一片の徴である。校庭を去るについては六ヶ年間師父と仰いだ校長先生の訓話、受持教師の教訓、其他學務委員知名士等の訓辭等に依て大に諸君の將來を戒告せられ、又下級生諸君の送別の辭は皆な校庭を去るについても懐しいものゝ一つである。

この過去の懐しさも面白さも、卒業證書或は修業證書を手にした後は忽ち過去の事に屬して仕舞つて



やがて美しい追憶の一つとなつて仕舞ひ、而る後諸君は又新たに前途に對する理想を抱く様になるのである。そして今迄永年の間家庭に於ける父母の慈愛、又校庭に於る諸先生の教訓を基礎として尙一層美しく善く、且又眞なる處の道に次の歩を移すべく種々と思ひに耽ることになる。

大切な時

全く其時が諸君にとつて最も大切な時なのであ



ると云ふ事を夢にも忘れてはならない。
 而かも諸君は立派に小學の課程を滞りなく了えて
 来たとは云ふものゝまだ獨立の人格を備えて居ない。
 例えて云へば、諸君が小學を出たと云ふことは、人
 間一生の計の上、即ち人間と云ふ大なる學問の道に
 あつては、未だ尋常一年は愚か、幼稚園の校門に漸
 く足をふみ入れた位の時なのである。決して諸君自
 身の獨斷によつて未來を推し測つてはならぬ。諸君



は第一に、父母恩師等は勿論のこと兄弟先輩等が諸
 君の行先をば、これから何うなることかと、他所の
 目で見ただ以上に深く心配して居らるゝことを念頭に
 置かねばならぬ。さうしたならば此次には徐に自分
 のゆくべき道に就て熟考し始めるのである、其場合
 己に諸君の念頭に置いてゐる父師先輩に其是非の批評
 を乞ふのに決して躊躇してはならないのである。

何にならうか



これは今に始まつたことでなく、物心のつき次第
 諸君の心中に間断なく、往來してゐた第一の欲求で
 あらう。しかし、諸君が何の爲に何にならうと云ふ
 事を思ひ起すかと云ふ事は、それまであまり考へ及
 ばなかつた事が多いだらうと思ふ。「何にならう」と云
 ふ心は小さいアイウエオも知らない小兒でも知つて
 ゐる。諸君が今迄有つてゐた希望も恐らくはそれと
 大差のないものであつたではあるまいか。



軍人になりたい——商人になりたい——と斯う云
 ふ言葉のうちにも、五歳の子供、十歳の子供と又諸
 君とを比べて、その言の内容に如何ばかりの差異の
 ある事に氣が付けられるであらう。小さい兒は赤い帽
 子が冠りたいからとか又其上になると勳章をさげた
 いから——と、又其上になればなるに従つて、兵卒
 よりも將校にと云ふ工合に同じ軍人の中には階級差
 異があり各に對して各異つた點があることに氣がつ



き、自分でも選擇しようと言ふ望を起し、且同じ勳章に對する觀念でも「綺麗な勳章で胸をかざりたい」と云ふ心から、やがて、何故に勳章を與へらるゝかと云ふ様な事を知る様になり「名譽を得たい」と云ふ心に變つて來てゐるのである。

諸君は一通りの普通教育を修了して來たのである相當の常識と、學問も備えたのである。少なくとも自己一生の或一步の根底を作らなければならぬ時代

に到達したのである。而らば如何にして、世に處す第一歩を踏み、第一の腕を振ふべきかに就て最重要な時代に如何にして臨まなければならぬか、これから少し述べて見ようと思ふ、先づ第一に

何の爲に學問をするか

と云ふ問題に就て、諸君は新たに考えねばならぬ簡単に云へば「偉い人になりたいが爲に」であろう、しかし「偉い人とは什んな人かに就て數ある正しくない



謬あやまつた考かんがえを持もつてゐる人ひとがないでもない。たゞ偉えら
 い人ひととして人々ひと々に崇すう拜はいされ、名なを後こう世せいに殘のこすのにも
 種々しゆくの徑路けいろの順逆じゆんぎやくや事情運命じやううんめいの廻まわり合あはせやがあるの
 で誰人たれひとも一様やうに思おもつた様やうに道みちを進すすんで行ゆけるもので
 はないのである。學問がくもんをした——これから又また學問がくもんを
 するからと云いつて、そう滅茶苦茶めちやくちやくに不む見み向かみすに進すすんで
 ゆかうとすると、飛とんだ間違まちがひを惹起ひきおこする事ことになる
 から是非ぜひひ、此何このなんの爲ために學問がくもんをするか、と云いふ事ことに就つ



ては沈着ちんちやくに思し考かうせねばならぬのである。
學問がくもんは自分じぶんの利益りえきの爲ためにするのではない
 學問がくもんは、自分じぶんが價値かちのあるものとして社しゃ會かいに生せい存ぞん
 する爲ために最必要もつともひつえうなのであるから、折角せつかく學問がくもんをしても
 人ひとに厭きらはれたり、又または自己じこ一いつ身しんの爲ために他人たにんに迷めい惑わくを
 かけるようなことがあつては以もつての外ほかのことである、只智ただちを
 要えうするにそれは眞しんの學問がくもんではないのである、只智ただちを
 學まなび種々しゆくの物識ものしりとなつて、それを甘うまく應おう用ようしてゆ



三
 ければいゝのではない。必ず其れに伴ふ人格の涵養
 が必要である。人間として立派でなければならぬ、
 此處に於て眞の教育の効果は表現されるのである。
 諸君は教育された長い年月、又これからも教育され
 る時日を徒にしてしまつてはならぬ。必ず偉い人間
 にならねばならぬ。

勿論偉いと云ふのは比較の言葉であつて、人並は
 ずれて悪い性質の人をも偉いと云ふ言葉の使方もあ

るが、今偉いと云ふのは人間として欠點の打ち處の
 ない人を標準として云ふのである。必ず諸君も或る
 標準を假想して立派な人間になり度いと思つてゐる
 に相違ない。

扨て、これで凡そ何の爲に學問をするかと云ふ事
 も解つたと思ふ。これから、此時に當つていよいよ
 諸君が差しあたつて考えねばならぬ事共に就て言を
 及ぼして行かうと思ふ。諸君の年頃になれば、殆何



になりたいと云ふ事に就て自分の心を決定してもい
ゝ時分である、又爲なければならぬ時なのである
それならば

何にならう？と即ち志を立てるのである。如何に
して世を渡り、而して人間として最上なる道を歩ま
うか？其れには澤山の道がある、それには何れの道
をとろうか？、其れは取りも直さず、其人の體力、
性質、嗜好、特長、缺點、境遇、位置等を基礎とし



て考え出さねばならぬのである。實に永年の計とも
なすべき事であるから目前の利益、欲求に依つて決
定すると大なる間違ひと成り終ることは明らかであ
るから重ね重ねも熟考せねばならぬ。先づ極く大別
するのに、前にあげた條件に依つて見て、又現在の
教育の上から見て、當然二つに分れてゆくのは中學
校に行くことの能る人と能ない人とである。今はそ
の後者の方を第一に主として述べて見よう。



中學にゆかずに

世に出ようとす人々には殊更此時代に充分立志と云ふ事に注意しなければならぬ。其等の人々のうちにも亦た様々と境遇事情が違つてゐて、其内には殆ど中學程度の教育を受ける余裕のある人と、全然自分の手から口にパンを運ばねばならぬ人との相異もあらうが、今は一とまとめにして述べよう。而かも中學入學者も其れ以外の人々にも、是非考えねばな

らぬ事であるのだから――。

自己を知れ

自分を了解すると云ふ事はなかなか容易の事ではない、聖人君子にも難事である。しかし今でもその心は必ず持つてゐなくてはならぬ、而して自分を顧ると云ふ事は最肝要なことである。先づ自分は何れだけの事をなす爲に何れだけの事を現在なし得るか此問題を明瞭にしなければ駄目である。此處に於て





相反する時は萬事は末になつて、反目すると云ふ事は火を見るよりも明らかなことである。

現在なり得る事をなした上で次に進め

要するに言行相一致を努むべく心懸くる事が第一の務めである、その部分的言行一致がやがて一生の大なる行爲となるのである。志を立て、後職業に就いたならば、第一に其職に忠實でなければならぬ。それが自分に忠實であり、社會に忠實なる所以であ



る。決して側目にふれてはならない、自分の信念に向つてはどしどし進みやり通すがいゝ。そして何時でも職業は神聖なるものであると云ふ事を忘れてはならない。自分の職業に愛憎をつかすような事は淺ましいかぎりである。それに随分堅い心懸けをもつてゐても、成長すればする程、人と接すれば接する程、世の中には、誘惑と云ふものがある。誘惑は常に美しい假面を冠つてゐる



其實美しいのではない。しかし一見それがまことに人の心を唆かし、動搖させるのに好都合に出来てゐる。父母の膝下から離れてゐれば尙のこと、殊に父母の慈愛をより少なく受けてゐる場合であつたらば誘惑の魔君は好餌御座なればかり双手をひろげて飛びついて来る。此場合蓋ろ智識や、感情は欺されて仕舞つて、防禦となるものは唯だ力強意志である。確乎たる自信を有する自分の意志である。



だから必ず、職業の傍にも意志を練磨することを片時も忘却してはならないのである。

修養に打ち克つものはない

慢心は何物にも負ける即ち油斷大敵である。常に自分にゆるみがあつてはならぬ。ゆるみを發生せしむるものは何時でも自分自身である。であるから、自分さえ堅い心を固持してゐれば、何物も之を犯す事が出来ないものである。



自分じぶんを犯おかすものは自分じぶんである、其外そのほかには何なにもない。縦令たへびやうま病魔びやうまであつても人ひとの心こころまで犯おかすことは決けつしてないわけである。人間にんげんが病氣びやうきに犯おかされる事ことも考かんがえて見ると随分ずぶんつまらないことである、之これを防ふせぐ第一だいの方法はうほうとしてはよく働はたらきよく遊あそぶことである之これが唯一ゆいの心身しんしんの慰安ゐあん法はふであつて、修養しうやう法はふであるのである。精神せいしん一到とう何事なにことかならざらんと云いふ様な心持こころもをもつて何事なにことにもあたると云いふ不屈ふくくつ不撓ふたうの精神せいしんの前まへには何事なにこと

も敵てきとするには足たらないのである。

金力きんりよくは役やくにたゝない

その證據しやうこには、如何いかなる萬兩まんにりやう長者おきなも一度たひ死しの手に捕とらえられ、ば免まなれることが能できないので解わかるではないか！第一だいは、心懸こころがけ一つである、現在げんざい巨萬きよまんの富とみを藏ざうしてゐる、カーネーギーにしても又また我國わがくにに於おける濫しよ澤男さばだんにしても岩崎男いはさきだんにしても、生うまれながら金力きんりよくに依よつて彼の如ごとき位置ゐちにつたのではない。皆みな相當さうたうに苦く心しん



の結果自身又は先代の刻苦の賜物であるのである。
 樂を求むるならば先づ苦しまねばならぬ。苦しみ抜
 き、闘ひ勝つて人生の勝利は得られるのである。座
 ながらにして樂をしようと思ふ様な了見は決して起
 すべきことではない。

獨立と冒險的精神

此二つは各異つた事で、而も相反した事であると
 は知りながらも、其結果に於て往々相混同する事が



ある。獨立は自分が他人に頼らずして立つことであ
 る。他人に頼つては獨立ではないのである。冒険的
 にやつた仕事が偶然にもヤマが當つて、而かも他人
 を全々あてにしてやつた事が幸か不幸か、自分の位
 置を安全にする場合も世にはあることである。實に
 厭ふべき事ではないか、此様な人は忽ち又過失を連
 發して元の木阿彌に歸つて仕舞ふであらう。而し此
 外誰にも過失はあるものである、此様な場合でも一



端自覺して、改めたならば幸福に世渡りをするこ
 が出来るのである。

幸福に世渡りするとは

良く生に活きると云ふ事である。それは、美食す
 る事でもない、邊服を飾る事でもない、又思ふまゝ
 に遊興する事でもない。唯自分が人に後指を指され
 ない様にするばかりでもない。尙國家を始め社會の
 爲力を盡して利益を増進せしめ以て、自分が此世に



生れた意義を明瞭にす可きである。御勅語にも「進ん
 で公益を擴め世務を蒙き」と云ふ御言葉がある、此道
 を始め、

教育御勅語にあること一切を守つてこそ、人とし
 て缺點の無い立派な——即ち最幸福なる一生を行き
 得るのである。それが即ち、忠良なる臣民として非
 點の打ち所のない完全無缺なる所業である。

情は人の爲ならず——



人間の徳は其處に存在してゐるのである。
 人間は社會を組織してゐる。犬猫畜生と類を殊にして一段高き靈命に誇つてゐる人間にして若し、只自己の爲に利をはかり、自己の欲求の爲に多くの仇敵を作らねばならぬようならば其生存に何等意味が無い事に無つて仕舞ふ。くれぐれも此根本的に確乎たる處信がなくてはならぬ。

大體の事は此位にして置いてこれからは、主要な



る職業の性質や就業の徑路等に就て述べ、又其間に處世上又志を決する上に於て緊要なる事を添えて行かうと思ふ。

諸君がある一定の職業に就くまでの徑路に就て前述の如くに、極く概別すると二つになる。其一つとして中學及其程度の學校即ち中學教育を受け得る條件を具備した人々の行くべき道を細説して見よう。

中學程度の學校には



中學校工業學校農業學校甲乙兩種商業學校師範學校其他特種の學校がある。そして乙種商業學校に比すべき商工學校や徒弟學校は尙數多あるのである。今これから順々に此等の學校に就て説明する。

中學校

これは最大多數あり而して他の學校の如く専門的でなく一般的に、即ち高等の學校に進みゆく自由な學校である、であるから在校中と雖尙自己の行



くべき方向に對して充分に思考する余裕があるのである。高等教育を受けんとするのに、此中學よりして向つてゆくのに何一つとして不便宜な事柄は無ものである、中學校は大抵一府縣に三校乃至五校は設立されてある、其他に私立公立等全國を通じて又無數存在するのである。入學資格は尋常小學卒業程度であつて、入學の後五ヶ年修業せねばならぬ、此間一心にさえ勉強すれば何にでもなれるのである。中



學は減多に官費の處はないが優等生を特待する事は
 各中學を通じて行つてゐる。又卒業の際は優秀なる
 成績を以てすれば高等學校始め諸官立學校に入學す
 るのに恩典もある。此外種々の奨勵法を以て諸君を
 奮發せしむる手段を講じてゐる。故に一心不亂に勤
 めたならば、學士になるにも、博士になるにも、
 といふ拍子にゆけるわけである。縦令優等生でなくて
 も中學卒業生となれば、殆ど何處の私立大學にも無試



験で入ることが能るのである。であるから事情が許
 すならば中學に入つて高等教育を受ける豫備をする
 のが、第一の得策である。終りに尙述べて置くが、
 殊に地方の少年等は、東京の中學、田舎の中學と區
 別を置きたがるが、これはそう大した問題では無い
 のである。何れにしても數あるなかであるから一得
 一失はあるに相違ないが、何れも同じ程度に決定さ
 れた機關である以上、諸君の把持せる信念一つに依



つて外に動搖差異のある可きものでは無いのである
 中には随分入學の困難な學校もある、又殆入學試験
 の必要さへない學校もあるが、それによりて學校の
 價値を定めるのは早計に失したる舉であると言はね
 ばならぬ。而らば

如何にして中學を選ぶべきか

否、中學のみにあらず、總て諸君が入學せんとす
 る場合、如何にして適當なる撰擇をなすべきか、此



問題に就て要項を述べて見よう。

特別の事情以外には、成るべく其土地の學校の確
 乎たるを選ぶを最上とせねばならぬ、其土地の中學
 校は、其土地に對して最少量なる目的對照を有して
 建設せられたのであることは言を待つべくも無い事
 である。即ち諸君にとつても、最便宜よく適應して
 與えられてゐると思はねばならぬ。であるからして
 諸君を開發すべき最も力ある設備がされてあるので



ある。或他の遠方の學校に著名なる特長があつたにしろ、遠方から其處に行く場合には、其特長とプラスマイナス零になり、或マイナスになる様な差引勘定の不利益な結果を齎す事は間々見られることなのである。要するに、井中の蛙と云はれ様が何と云はれようが、諸君の前途は尙遠遠である以上、左様な事に、小心翼翼々として氣に觸れる様では最後の勝利を得る事も又難事と云はねばならぬ様になつて仕舞

ふのであるから、極周到な、平靜な態度で自分の入學すべき學校の選擇に向ひ、尙前述の如く動もすると誤り易き道の多い事に注意する事が最肝要である。

甲種商業學校

これは殆んど中學と同じ程度であるが、商業とか簿記とか云つた様な學科を特別に教授して卒業後直に社會に出で商業に従事される様に組織されてゐる又途中で尙教育の程度を或一層高くまで修めようと



思えば卒業後それごとく其方面に高等教育も受けられる様になつてゐる。商界に雄飛しようとして、中學のみで修養を止して實業界に入るよりは甲種商業に入つた方が遙か安全にして確實なる方法である。之を卒業すれば、可成りの地位を得る事が出来る、就職難などはあまり感じずにも済む次第である。又

乙種商業學校

も殆ど甲種商業學校と比肩した資格を得られるたゞ



高等教育を受ける場合には少し準備もしなければならぬ様なことにはなるのである。

農業學校及工業學校

商業に於る商業學校の如く農工業に於る中等な課程を修める處であつて、各々各府縣に一校乃至二校設けられてゐて、普通一般の中等教育をも併せて學び、而して工業なり農業なりに特に要する智識を組織的に修養せらるゝ様になつてゐる。此等も又勉強



次第高等教育並専門學科を修めるのに又左程の困難
 を感せず登階される様になつてゐる。又腕次第で
 或職業に従事しつゝ、其道の濫奥を極める事も易い事
 である。兎に角此等の學校を卒業して置くのは單に
 中學を卒業した人々と異つて、或る處まで専門的の
 學科を修めてゐる故に、自分の方向にも、中途から
 も迷ひ出す様なことを見受けなしいし、又半にして頓
 挫する様なこともなし、生活の上には可成りに安定



を與へてゐる事は事實である。而して此等の學校—
 (商業、工業)、等は都市によりては夜間も授業する爲
 に、一方職業の暇に修學する人々の爲にも尠なから
 ぬ便宜を與へてゐる。それは又苦學的勉學法の項に
 改めて詳説することとする。其他にも同様の學校も
 少なくない。今は只一般的に小學卒業生が容易に入
 學し得る學校學會の名稱のみを列舉して置く、無論
 其内には職業のかたはら修學し得るものも多く含ま



れてゐる。官費の學校としては、師範學校(次項詳説)陸軍戸山學校軍樂生、陸軍砲兵工科學校、通信練習生、帝國鐵道院電信修技生、砲兵工廠見習職工等であつて又私費にして而かも多額の費用を要せないものをあげれば、獸醫學校、藥學校、主計學校(陸海軍とは關係なし)、鐵道學校、職工徒弟學校、職工學校、簿記學校、速記法研究會、水産學校、染織學校、山林學校、英語學校等がある。



師範學校

師範學校も各府縣に尠なくとも一校はある。高等小學さへ卒業すれば滿廿二歳に達せない限りは何人でも受けられるのである、官費とは云ふものゝ幾分か小使位は自分の方で出す積りでゐなければならぬ修業年限四ケ年で小學校訓導となる、尙勉強次第高等師範にも行けるのである。これを師範學校一部生と云ひ其外に第二部生と云ふのがある。之は中學卒



業生が入るのであつて修業年限は一ケ年であるが之は略すこととする。

陸軍地方幼年學校並に

中央幼年學校豫科

此兩者は同一の性質のものである。陸軍將校となるべき者を養成する處であつて、陸軍省の官轄に屬し、豫科は東京に、地方幼年學校は、仙臺熊本名古屋廣島大阪の各師團所在地にある、官費としては、



様々條件があるから普通の人は毎月約八九圓も拂はねばならぬ。志願者年齢は十三年五ヶ月以上十五年五ヶ月以下、身長四尺四寸中學一年程度の入學試験を受けねばならぬ。

小學卒業生が差しあたり志望し得る學校は大略前述の如くである。

扱て此れから入學志望前後の心得ともなることを書かうと思ふ。尙卷末に主なる學校の所在地等を略



記して、諸君が一層精しい規則其他の事項を知られんとする便に供せんとする積りである。

入學志望前の心得

としては述べ終つたつもりであるから、以下は主に其後の留意すべき事に就て書こうと思ふ。

小學校を出て中等の學校へ行く様になれば、中には自宅から通ふ事も出来る人もあるけれども多くは、温情甘き慈愛深い兩親弟妹の家を捨て、



遙けき空へ

旅立つて行かねばならぬ事が多い。何事も従來とは違ふのである。眼に耳に事新しく感ずる。いとも物珍らしい事々に浮き立つた心の隠には云ふに云はれない悲哀を感ずるのである。束縛を遁れて自由の天地を小鳥の如く唱ひて活歩する事を樂しむと同時に、旅の空に獨り漂う物淋しさ、遺瀨なさが犇々と身邊に迫つて來て、可憐なるわが少年等は人知れず



其紅顔を熱い涙で濕らすことであらう。

哭

此涙よ！これぞ諸君をして未知の國に入る第一歩の洗禮なのである。わが少年等よ！其時思へ！

父君母君の心中を推し測つて思ひ給へ！又自分の立場を顧み給へ！決して忘れてはならぬ事である。

御身等が成功して名を爲すも、遂には邪道に足を踏み入るゝに至るも此時に境する事が間々ある。深く反省し給へ！

悲しき時は神に依りて慰安を求めよ

神即ち自分の確かな明白な曇りなき燦々たる鏡面に諸君の姿を見出せ。との事である。

決して他に之を慰め勞ふものゝありとは假にも想ひ及ぼすことではない。

恚うした精神の昂奮した時には動もすれば自己本來の精神を没却して仕舞ふことがある。自己の立脚地をも忘失して漠然として、あだかも夢中に浮游す

兎



るが如き状態に自分を見出さねばならぬ事がある。
 此の如きは深く慎まねばならぬ事である。男兒笈を
 負ふて郷關を出でた上は

功成り名を遂げずんば死すとも歸らず

と云ふ様な氣概が無くては駄目である。

家郷にある兩親と雖も最愛の愛兒を手許からはな
 して置くことは、身を切らるゝよりも辛いことなの
 である。それにもかゝはらず、其の苦痛を忍んでも

吾



尙我子を異郷に修學の爲出したと云ふ事に就ては諸
 君も又自覺せねばならない處である。故郷に錦を衣
 て歸る日をば早其日から指折り數へて待ち焦れてゐ
 る兩親に對して、萬一不愉快な音信を聽かせねばな
 らぬ様になつたらば、如何ばかり辛いことであらう。
 其時になつて泣いてもわめいても追付く筈の物でな
 い。思ひ出しても身の毛の慄つ様な事である。故に
 諸君は實に根本的に前途に對して眞率の態度を取ら



ねばならぬ。

物事は馴れて来ると

兎角忽諸になり勝ちのものである。よし最初の中は随分立派な自信を有して自制し得られても、友達が出来、面白い話の間や、遊戯の中に自分が交る様になると、追々と自分の心も奪れ勝ちになるものである。それと云ふのも皆自制力が足りないからである。諸君は常に此の心懸けを遵守してゐなければならぬ。



らぬ。

食卓にある時でも、雑談に耽つてゐる時でも常に

父母の側に侍してゐるものと思つて

ゐるのが最良き自制法である。しかも立派な自制法である。父母に且つて注意された事は茶碗や箸の持ち方にでも注意するであらう。不快だと思ふ談話もなさぬであらう。恚うしてゐれば決して間違がない理由である。其れが出来ないのは取りも直さず



自己を偽つてゐるのである

自己を偽ると云ふ事は最も悪いことである。自分の信念の遂行能はないで兎角心が狂がるのは甚だ厭やらしい事である。自己を偽るなと云ふことは、邪慾を制するなと云ふ事では無い。此區別をば熟く明かにして置く必要がある。一見自己を偽るの甚しき事の様には思はれること——例へば『服従』の或種の如き——がある。全く自己を欺つてゐる事もあるので



はあるが、左うでなくして左う思はれる事も多分にある。それは、それを判断する作用が既に偽られてゐるそれに気が付かないのである。結居虚偽を以て鍍金されたものと、眞の黄金との色別が付かなくなるのである。此等の事は冷靜なる道德的觀念或は常識をもつて判断すれば一目瞭然たる事である。故に此の如きことに限らず、學術の上に於ても、或は不圖遭



遇したる事實の上に於ても不審の事があつたら

眞面目の態度で疑へ！

決して女らしい、邪推がましい浮薄な疑ひを起してはならぬ。人間は元より全智全能のものではないから、疑念の發生するのは當然である。そして此疑念とそれから事實の經驗と云ふ二つの事柄は、何れくらい人の一生の事實の斷定を與へてゐるかは誰も知る事がある。實際人には此二つの事を基にして、



對話の間に斷定的に言葉を交してゐるではないか。恚うして諸君は一步一步と深く進んでゆくのである。何事も眞面目であれ。其證據には必ず眞面目な疑が出てくるであらう。しかし決してそれを等閑に附してはならぬ。諸君は父母の膝下を去つてから、一日一日と自分の周圍が變化し又自分自身も變化してゐるのに氣が附かねばならない。



よき變化はお互に喜ぶべきことである
 而し變化は悪くする方が力強い。之に打ち克たね
 ばならぬことは度々前に云ふた。しかし又今茲に種
 々の事實を例にとつて重言しよう。
 寄宿の舎監も、下宿屋の主人も、厄介になつてゐ
 る親戚の人々も、皆親切である。皆諸君の爲に全力
 を注いで力を盡してくる。しかし親程諸君に對し
 て親愛なものではないと見なければならぬ。何んな



やかましい規則のもとにも、親の目よりは大きな穴
 のある事は一般である。随つて諸君は自由な境遇に
 置かれる。自由は善良且神聖なことである。喜ぶべ
 きことである。而し其自由のもとにあつて諸君は其
 自由を善く用ひなければならぬ。自由の下にあつて
 こそ諸君の價値は始めて善くも悪くも認めらるゝの
 である。

最解り易く之を金錢上の問題にとつて見ると、諸



君は親元にある時は殆ど金銭を自由に消費する機会が無かつたであろう。全然自分の手に金銭を觸れる事が無いが、又あつたにしろ其消費用途はお互に明らかになつてゐたのである。

今幾分か金銭を自己の意志のまゝに消費し得る機会即ち自由が興へらるゝと、それはあだかも國元に於て消費用途の分明してゐる場合と同様に處理しなければ無いにもかゝはらず、兎角に自由に而も自分

否



の欲望を満す爲に消費したくなるのである。金銭を自由に消費すると云ふ其事は悪い事ではないが、それを善く用ひねば、學生ならば學生としての用途以外に消費することになる。そうすればそれは甚悪い事となるのである。金銭に對して此様な自由があるならばいくらかも之を善用する機会があるのである。自分がつてゐない有用なる書籍一冊を求めた事は買はないに數等優る善い行爲である、即ち金銭――

二



自由を善く用ひた事である。此例に依つて諸君は自由の何物であるかが熟く判明された事であらうと思ふ。

三

社會を知るのが肝心

小學を卒へて進んで中學に入り、更に高等の學校に入り専門學を勉強するものは、境遇上社會とは殆んど没交渉であると言つても宜いが、小學を卒業すると同時に、中學其他の學校にも入らず、直ちに社



會に出で大に活動しようといふ青年は、先づ何よりも知らねばならぬのは、現代の社會である。社會とは即ち吾々人類の共同生活する場所であつて、此の世の中に生きてゐる以上、必ず他の個人と共同生活を營まねばならぬものである。如何なる聖人賢者と雖も、單獨で生存出来るものではない。精神的にも、物質的にも必ず他人と交渉し、若しくは共同して生きてゐるのである、而して此の人類の共

三



同生活は極めて微妙なる感情を有する個人々々に依
て組織せられてゐるもの故、從て其共同生活も亦た
極めて複雑微妙なるものであると云はねばならぬ。
誰しも人間は喜怒、哀樂其他さまざまな感情を有し、
而して其のさまざまな感情は種々なる場合に於て、
他人の感情と觸れ合ひ、其都度双互の間に、種々な
變化を持ち來らすものである。即ち或る者は金錢
上の關係より他人と感情の衝突することもある。

益



又或るものは主義上から他人に衝突することもある
う、かくの如く吾々は此の社會を組織して他人と共
同生活を營んでゐる以上は常にさまざまな場合に於
て他人と感情の衝突することがあるものと覺悟せね
ばならぬ。

以上述べ來つたやうに、吾々は此社會に於て極め
て、且つ微妙に他人と協同生活を營んでゐるのであ
る。其故之れを社會全體に就て觀察したならば、其

益



社會の内容なるものは極めて複雑で、且つ微妙なることを知らるゝのである。即ち社會は恰も人間の體內にある神經組織のやうなもので、極めて複雑なるものである。而して又極めて感じ易いものである。即ち社會は常に些々たる動機、原因に依て種々に進化し、又は退化してゐる。即ち或る場合は戦争に依て、或る場合は飢餓に依て社會は必ず夫々其の動機の如何に依て、何等の變化をなすべきものである。



殊に近代の如く歐米諸國との關係も複雑になり、又歐米の精神的、物質的の文明が日を追ふて吾國に輸入せられるやうな際には、吾々日本國民の協同生存場たる日本の社會も亦た其等に依てさまざまな變化をなすのは已むを得ない處である。而して目下の日本を見るに、内地のさまざまな動機、原因等に依て吾々社會が種々變動するよりも、寧ろ歐米諸國に多く因を有する種々なる動機より常にさまざまな變



化をなすやうな感がある。これは歐米の先進國は最早殆んど文明の極度に達して、其が爲めにさまざまな社會問題が起り、其の餘波が吾が國に及んで來るのである。

以上の如く吾々日本國民が協同生活場たる日本の社會が、本來より復雜で、微妙なるものである上、尙世界各國よりの影響を受け、尙一層復雜ならしめられてゐるのが日本の現状である。故に現代の日本

の社會は、小學を卒業したばかりの諸君には到底眞實に解釋出来るものではない。而して又現代のやうな復雜な社會を眞實に知るといふことは如何なる人にとつても非常に困難なことであると云はねばならぬ。

しかしながら吾々が日本國民として現在日本に生活してゐる以上、どうしても日本の現代の社會といふことを是非知らねばならぬ。社會を知らずして社



會に生活し、而して大に活動し、多少なりとも成功を企てるのは、恰も海を知らずして航海し、而して未見の富を發見しようとするやうなものである。何人と雖も此の社會に於て大に活動しようとならば必ず社會の狀態如何を是非知らねばならぬ。殊に高等教育を受けず、單に小學を卒業したものでばかりで社會に立たうとするにはどうしても社會を或る程度まで眞實に知る必要がある。即ち専門學校、



大學等に於て高等専門の教育を受けたる者ならば、其學びたる専門の學問若くは技術を手頼にして社會に活動し得られるも、單に小學を卒業したのみで、何等の専門の學問も、技術も修得せざるものは全く自己の天賦の才能に依て社會に立たねばならぬのである。而して自己の天賦の才能を以て社會に立たうとするには、先づ自己の天賦の才能が現代の社會の如何なる方面に發揮せしめて良いかといふことを知



らねばならぬ。即ち自己の天賦の才能が現代の社會の如何なる方面に於て要求せられつゝあるかといふ事を知る必要がある。言へ換へれば自分は社會の如何なる方面に於て要求せられつゝあるかといふことである。而して自分が要求せられる方面といふのは即ち自分に尤も適當なる方面といふことである。自分の尤も適當なる方面に突入して活動するといふことは云ふまでもなく成功の第一歩である。



如何にして社會を観察すべきか
 自分を要求してゐる方面に突入することを以て成功の第一歩であると説いた。かうなると社會の如何なる方面が果して自分を要求してゐるかといふことを知るの必要なることである。而して社會の如何なる方面が自分を要求しつゝあるかといふことを知るのは決して容易なことではない、即ち自分は將來自分を要求する方面——言へ換へれば自分に尤も適當



な方面に突入する道を知るといふことは決して容易なことではない。これさへ知れば社會に於て成功するのには必ずしも難事ではない。過去若しくは現在の成功者、即ち政治家、實業家、軍人として成功したものは皆な悉く自分の適當なる方面に向つて突進した人々である。即ち自分の適する場所に自分を置いたのである。政治家として成功したるものは其人の性來が政治家たる適してゐた上に、非常に努力した



結果、成功したものである。實業家も、軍人も皆な悉くさうである。決して自分を要求せざる方面、即ち自分の適當せざる方面に突進して活動したものである。而してかくの如く自分に適せる方面に向つて突進し、そして大に努力しようとして決心したのは、皆當時の社會を明瞭に理解してゐたからである。即ち現代の社會に於ては自分の如きものを政治家として、若しくは軍人として活動することを要求してゐ



る。言へ換へれば現代の社會に於ては恰度自分の如きものが政治家たり、軍人たるに尤も適當なる人物であるといふことを明瞭に理解したからである。

現代に生活してゐながら、現代の社會を明瞭に理解することが出來ないといふことは其人にとつて極めて不幸なことである。自分の生活してゐる社會を知らずして成功を夢みる位無謀な、冒險なことはない。かくの如き人は決して成功すべき性質のもので

夫

はない。

自分が現在生活してゐる社會を明瞭に知るといふことは、即ち自分の現在生きてゐる世間をはつきり知るといふことである。此の世間を知るといふことが尤も肝心なことであつてこれを知らずにゐては何事にも成功し得ないのは勿論のこと、又何一つ着手し得られるものではない。故に何事を企て、若しくは何等の方面に成功を希ひ、而して將来自分の安

七



住すべき樂園を見出さうとするにはどうしても、前
述の如く世間をはつきりと知つて、其の後に自分の
將來の目的を決定せねばならぬ。

かくの如く現代の社會を知ること、即ち世間を知
るには如何にすべきかといふに、これは又さまざま
な方法がある。而して又世間をはつきりと理解する
といふことは考へやうによつては非常に複雑な、面
倒なことにもなる。即ち學者が世間を知る場合、言



へ換へれば學者が學術的に現代の社會を理解すると
いふことになると、政治的、經濟的、道德的等さま
ざまな立場から解釋せねばならぬこと故、非常に複
雑なことになるのであるが、茲では小學校卒業生に
就て言ふのであるから、決して以上のやうな複雑な
方法に依て社會を解釋することではない。尤も簡單
に、要領を得たる程度に理解することである。即ち
小學卒業の學力程度を以て現代の世間を理解するの



である。これが何よりも肝要である。

合

これにはさまざま手段がある。而して其中でも尤も必要なこととして何人も心得ておなければならぬは、先づ最初に常識を養ふといふことである。常識を養成するといふことは、人が何事をなすに就ても、最初に、且つ最も必要なことであると心得ねばならぬ。此の常識を養成するといふことを忘れては従令如何なる才能を持つてゐても、決して成功すべ



きものではない。所謂非常識な人間とは社會に於て何事にも決して成功しない人間に與へた名稱である。現代に於て非常識な人間程憐れな、又恐るべき人間はない。かくの如き人間は如何程多くあつたからとて社會には何等の利益を與へないのである。常識を養成するといふことは、即ち何事に就てもさしたる間違のない見解を持つやうにするといふことである。尙簡単に云へば何事に對しても常に穩健

ハ



にして正當な見解を有し、決して突拍子もない説や
又行動などを敢てなさないといふことである。正當
にして眞實なる見解を持たず、常に間違つた考を持
つた非常識な人は何事にも失敗すべきものと見ねば
ならぬ。

而して常識を養成するには如何にすべきかといふ
に、これはどうしても教育に依らなければならぬ。
教育とは單に人間に智識を與へるのが目的であるば



かりでなく、人間の隠れたる才能を開拓するのが目
的であるから、これに依て自分の未現の才能を開拓
し、種々なる智識を得るのが尤も安全な方法である。
教育と云つても茲では必ずしも學校教育のみを意味
するのではなく、さまざまの方法で智識を得、而し
て自己の隠れたる才能を開拓し、發揮させるものは
すべて教育であるといふことが出来るのである。故
に小學校を卒業して進んで中學其他に學ぶも、教育



であり、又は自ら講義録其他に就て獨學するのも教育であるといふことが出来る。即ち獨學してさまざまの智識を得ることは自らの力に依て自らを教育するといふことである。

茲では小學から進んで中學其他の學校に入り勉強するものよりも、寧ろ小學を卒へたるものが將來社會に活動するもの、爲めに記述するのである故、主として獨學に依て常識を養成する方法を記述するこ



と、した。獨學に依て常に必要なる智識、即ち常識を得べきかといふに矢張り普通學の一般に就て學ぶのが何よりの得策である。それはさまざまの方法がある。即ち獨學に依て普通學を學ぶもの、爲めに設けられた通信教授機關もある。即ち市内各處には中學講義録を發行して、市内若しくは地方の青年中、中學に入ることの出来ないもの、爲めに極めて進歩した方法で、通信教授をなすものがある。是等は多



數の會員があつて、且會員中には可成の成功者があるのであるから、是等の講義録に依て普通學を獨學するものも一方法である。又普通學に關するさまじく、な書籍が無數に發行せられてゐる、其等の中には地方の獨學者の便利なるものも尠くないから、其等に依て普通學を獨學し、而して一般人間に缺くべからざる智識を養ふのが何よりである。

以上の如く中學講義録、其他の獨修書に依て一般



の普通學を獨修し、普通學に關する正當なる智識を得、一方に於て實際の社會に於て見聞したり、若しくは先輩に依て教へられたる處を正當に理解してさへあれば小學卒業したばかりでも、中學卒業生と同等の智識を得ることは決して困難なことではない。又以上の如く普通學を獨學し、實際の社會に於て見聞しなどして一般の智識を得ると共に、新聞雜誌などを精讀する必要がある。新聞雜誌などを頭腦の



鞏固ならざる少年が讀むといふことは決して良いこ
 とではないなど批難する人があるけれども、かくの
 如き議論は決して正當なる議論ではない。新聞雜誌
 などは皆な悉く現實の社會に於ける最近なる出來事
 若しくは學術上の研究、其他のさまざまな趣味に關
 する事柄を多く掲載してあるもの故、これを讀んで
 決して害になるものではない。害にならないばかり
 でなく非常に有益なことであるから、大に讀まねば

六

ならぬものである。而して其等の記事中有る特殊
 なる事柄即ち學術上、若しくは近世の文明的事業な
 どに關する有益なる記事は切り抜いて保存して置く
 ことも亦た必要である。

中學講義録、獨修書等に依て普通學に關する正當
 なる知識を得、而して其上新聞雜誌等に依て近世の
 事情を知り、尙先輩等の經驗等を聞き、かくして小
 學卒業後三四年も經過したならば、中等教育を受け

八



たるものと比較して何等の遜色なき人間となり得るのである。即ち社會に立つて活動するに缺くべからざる知識即ち常識を具へ、而して此常識を基礎として社會萬般の事柄に對して正當な見解を持つやうになり得るのである。

普通の人格を有し、以上の方法に依て常識を具へるたものが社會に對する場合は、決して無教育な、即ち非常識な人間が社會に對する場合よりも極めて



優利である。それは何故であるかといふに健全なる常識を具へるものが社會を観察する場合には、決して間違つた觀察を敢てしない。即ち世間を間違つて見ないで、正しく見てゐるのである。

かくの如く社會を正當に見て居れば自然と、社會の流行とか、傾向とか、大勢とかいふやうなことに通ずる故、其を基礎として尙一步進んで將來の社會をも達觀し得らるのである。かくすれば自分は將



來如何なる方面に活動すべきか、即ち將來の社會は如何なる方面に於て自分を要求しつゝあるかを知るやうになるから、何事につけても非常に便利である。以上いじやうの如く社會を最も正確に理解すること、即ち世間を最も良く知る爲めには何よりも先づ常識の必要なることを説いた。健全なる常識を有してゐたならば決して社會を間違つて見るものではない。それのみならず常識を有してゐれば、自分と社會との關



係をも明確に意識し得らるゝのである。即ち社會に於ける自己の立場、又は自己の有する才能が社會に何程の價値を有するものか、又それを如何なる手段に依て社會の如何なる方面に發揮すべきかといふやうな考へについても決して間違つた考へなど持ち、而して或ひは自己の才能を非常に高價なるものに見積り、無謀なる計畫などを立て、失敗し世間の物笑ひなどになるやうなことはない。故に不慮の災變で



もない限りは失敗するやうなことはない。

以上述べ來つたことを簡単に云へば、即ち小學校
育を最後とせるものは獨學に依て普通學を修め、其
他種々の方法に依て健全なる常識を養ひ、其に依て
自己の才能を發揮させ、尙常識に依て社會を最も正
確に公平に觀察し、而して社會と自分との關係を明
かに知り、而して自分の將來を決定することが何よ
りも肝要なことであるといふことである。



職業は如何にして選擇すべきか

既に健全なる常識を具へ、自分が現在生活してゐ
る社會を正當に理解し、而して何等かの職業に就事
して將來其方面に活動せんとするに當つて、何人も
顧慮せねばならぬのは如何にして職業を撰擇すべき
かといふことである。

職業は人が社會に立つて人として體面を保ち、又
自らを養ひ、家族を養はんが爲めには必要なことで



あつて、一日も離れてはならないものである。昔の封建時代には浪人と稱し武士にして大名に仕へず、諸々方々を流浪し歩いたものがあり、而して此の浪人等は至る處に多少の悪事を働き、そして自らを養つたものであるが、かくの如きことは社會組織の不完全な封建時代に於てこそなし得たのであるが、現代の社會の如き一切の組織はすべて秩序正しく、毫も不完全な處のない時代に於ては無職の浪人となり、

矣



諸國を流浪しながら自分の生命を保つことは全然不可能なことである。立憲國の法律は極めて嚴重であつて些かの悪事をなすことを許されてゐない、悪事を働きながら自分の生命を保存し行くやうなことは絶対に不可能なことである。故に如何なる人と雖も何等かの職業に従事し、其に依て得る處の報酬に依て自らを養ひ、又家族を養ふことを思はねばならぬのである。如何なる才能を有するものと雖も無爲徒

老



食するに於ては社會を何等利する處はないのである。天賦の才能を有し、而して其天賦の才能を職業に従事することに依て、社會を、民衆を、國家を利益して始めて其人の價値が現はれるのである。即ち人間としての價値は其人がどれ程社會、民衆、國家を利益したかに依て判斷せらるゝべきものであつて、其人の天賦の才能の如何に依て判斷せらるべきものではないのである。

先



しからは圓滿なる人格と、健全なる常識を有するものが如何なる職業に従事して自己の才能を發揮し而して社會と、民衆と、國家を利益すべきかといふに、これは亦た極めて重大なることであつて、容易に斷せられるべきものではない。即ち自己の將來の職業を決定するといふことは容易ならぬ問題であるのである。故に是等のことに關してはさまざまの人々がさまざまの意見を持つてゐる。而して是等の人

先



々のさま／＼な意見を綜合して考へて見ると、歸する處は大體がかうである。即ち自己の職業を撰擇するには、先づ自分の性情と、特質と、境遇と、社會の狀態と、教育の程度如何とに依て決定するに於ては先づ大した間違はないといふ事であるのである。先づ第一に性情に就て云へば、人は各々異つた性情を持つてゐることは云ふまでもないことである。即ち或る者は感情的であり、或るものは理性的であり、



又或る者は熱狂的であり、或る者は沈靜的であるやうに必ず異つた性情を持つてゐるものである。故に職業を撰定するに就ても、以上のことを良く分つた上にしなくてはならない。感情的な者が理性的な人に適當なる職業をして成功すべきものではない。同時に理性的の者が感情的な人に適當する職業に従事したからとて成功すべきものでもない。又各自には必ず特性といふものがある。即ち或る



者は天性數理的頭腦を持つた者と、或る者は想像に
 豊かなるものもある如くである。是等も亦た職業を
 撰擇する上に必要なる條件になるものであるから、
 豫め何人も注意しなければならぬ處である。
 尙自己の境遇、社會の狀態等も職業撰擇の上から
 是非とも考へねばならぬ處のものである。即ち特殊
 なる才能を持つたものであつても、自己の境遇の如
 何に依ては自己の才能を充分に發揮し得られない場



合がある。偉大なる天才とか、強者であるならば或
 は自己の境遇に打ち勝つて、自己の才能を充分に發
 揮することが出来るが、さもない通常の人であるな
 らば多くは境遇に依て支配せられる場合が多い。又
 常人が境遇に打ち勝つてまでも自己の才能を發揮さ
 せる爲めには非常なる犠牲を拂はねばならぬ場合が
 多い。それよりも寧ろ境遇に順應して自己の才能を
 發揮することに努めた方が、尤も安全な方法である。



又社會の狀態を知ることとも職業を撰擇する際に必ず顧慮せねばならぬ問題である。即ち自分が將來就事すべき職業が、社會の狀態から見て、果して有利なるものであるか否やといふことを豫め知る必要がある。云ふまでもなく職業は遊戯ではなく、其に依て幾らかの報酬を得、而して其れに依て自分を養ひ、家族を養ふべき性質のものであるから、従つて社會の經濟狀態などとは殊に密接なる關係を有するもの



である。其故若し自分の將來従事すべき職業が社會の狀態から見て極めて不利益な場合には、職業に就て幾らかの生活費を得るといふ最初の目的に相反するやうなことになるから、最初撰擇する場合に於て大に注意すべき事柄である。

小學卒業生に適當なる職業

小學を卒業して中學へも入學せず、最早何等かの職業を撰擇して従事し、自活せねばならぬ者に如何



なる職業が尤も適當であるかといふに、それは比較的簡易なる職業が尤も適當なるものであるといふことに歸するのである。小學卒業生に云へば最低の教育を受けた者であつて、又活社會に於ては最年少者であるから、どうしても簡易なる職業に就くのが當然である。最初より雄大なる志を懷いて、復雜にして困難なる職業に就くことを望んだからとて決して成功すべきものではない。現代の社會はそのやうに



單純なものではない。況して大學、専門學校の堂々たる卒業生が極めて簡易にして低級なる職業に就てゐるやうな有様である故、最低度の教育を受けた、最年少者が復雜な、困難な職業に就くことなどは最初より失敗の原因をなしてゐるものである。其故最初は最も簡易な、而して最も程度の低い職業に就き、それより順次自己の知識を増し、且つ才能が自由に發揮されるにつれて徐々に復難なる、困難なる職業



に向つて行かねばならぬものである。

簡単にして程度の低い職業には種々ある。即ち郵便局員、鐵道驛員、内外汽船員、各官廳雇員若しくは給仕等である。是等は皆な相當の手續を要し、又は種々なる條件を有するもの故、希望者は豫め其等の手續、條件等を知ると共に、又俸給勤務時間等をも是非知らねばならぬものである。其等の一般を知らしめんが爲め、本院は殊に「就職者の顧問」と題し小



學卒業生若しくは中學中途退學者に適當なる職業の内容を極めて忠實に紹介したる書籍を發行しあるを以て、本書の讀者もこれに依て種々なる職業を知り而して自己に尤も適當なる職業を撰定した方が最良の策であると思ふのである。

餘暇を利用せよ、將來大に活動せよ

さて自己に尤も適當なる職業を撰定して一旦就職したる以上は、決してそれに依て満足してはならぬ。



或は講義録に依て、或は夜學に通學して出來得る限
 りの勉強をなし、而して將來相當なる年齢に達し、
 自己の才能を自由に發揮し得られる職業を撰定し、
 それを以て社會を、民衆を、國家を利益する準備を
 なさねばならぬ。何時までも、小學卒業程度の學力の
 みであつては、何時まで簡單な職業に就き、従つて
 自己の才能を自由に發揮し得ず、又報酬も極めて少
 ない程度に止めねばならぬやうになる故、最初簡易



なる職業に従事してゐる際、餘暇を利用して普通學
 若しくは特殊の専門學を修めることを企てねばなら
 ぬのである。
 晝間の職業に従事してゐる者ならば夜間、又夜間
 の職業に従事してゐる者ならば晝間、各々一日に三
 時間内外の餘暇あるべき筈のもの故、其の餘暇を利
 用して地方にある者ならば講義録其他の獨修書に依
 り、又た東京市内にある者ならば晝間、若しくは夜



間の學校に通學して熱心に勉強することを忘れてはならぬ。

かくの如く勤務の餘暇を利用して勉學すると同時に自己の従事する職業上より種々なる事柄を見聞する場合には一々それを記憶に止め、而して健全なる常識を養成し、又一方に於て種々なる雑誌若しくは著書を精讀し圓滿なる人格を完成することに努め、而して機の至るを待つて、將來大に活動し、社會の



爲め、民衆の爲め、國家の爲め大に利益せんことを心懸けねばならぬ。

成功 立身の相談終

大正四年六月十日印刷
大正四年六月十五日發行

立身の相談

定價金二十五錢

著者 鈴木皓天

發行者 高宮政人

印刷者 大橋省三

印刷所 大橋省三堂



發兌元

東京市麹町區富士見町二丁目三十七番地
振替貯金口座東京二一八〇五番

産業書院

278
100

終

